「グシュメーシュヴァラ・ジョーティルリンガの出現」

—『シヴァ・プラーナ』第４巻「コーティ・ルドラ・サンヒター」第33章和訳—

山　口　しのぶ

１．はじめに

『シヴァ・プラーナ』*Śivapurāṇa*第４巻「コーティ・ルドラ・サンヒター」*Koṭirudrasaṃhitā*（略号 KRS）第32章および第33章は12のジョーティルリンガの聖地の一つ「グシュメーシュヴァラ・ジョーティルリンガ」（guṣmeśvarajyotirliṅga）の縁起譚を述べている[1]。（山口　2013）においては第32章を和訳した。第32章は以下の内容である。バラモンでシヴァ神信者のスダルマーと妻スデーハーに子供ができず、夫は妻の妹グシュマーを娶る。グシュマーはリンガ像を作ってシヴァ神を礼拝し、息子を得る。しかし子供の出来なかった姉スデーハーは、妹に嫉妬する。

続く第33章には、嫉妬した姉が妹の息子を殺し、身体を切り刻み池に投げ込む、という凄惨な場面が登場する。しかしながら妹グシュマーがシヴァ神の名前を唱えると息子が生き返り、シヴァ神の恩寵により息子を殺した姉スダルマーの罪も無くなる。またグシュマーの願いによりシヴァ神はこの地にリンガの姿で留まることとなり、それが「グシュメー

[1] 12ジョーティルリンガに関しては（山口2008）（山口2012）（立川2008：172–173）参照。またグシュメーシャ・ジョーティルリンガは現在のマハーラーシュトラ州エローラ地区のグリシュネーシュヴァル・ジョーティルリンガ（Gṛṣṇeśvar Jyotirliṅga）寺院を指すとされるが、GuśmeśvaraがGṛṣṇeśvarと名称を変えた由来については、（山口2013：105）の注２に述べた。また現在のグリシュネーシュヴァル寺院の歴史等に関しては、（Vitekar 1991）に詳しい。

シュヴァラ・ジョーティルリンガ」となった。

このようにシヴァ神が信者に恩寵を与え、信者たちの願いでその地にリンガの形で留まり、そこがリンガの聖地となるというストーリーは、ジョーティルリンガの縁起譚の中ではしばしば登場する[2]。ジョーティルリンガの聖地はインドの広範な地域に分布しており、これはヒンドゥーの大伝統としてのシヴァ神が地方に広まる際に、男根としてのリンガという、どちらかというと非アーリヤ的な形をとり定着することを、プラーナの寺院縁起のストーリーで端的に示したものであると考えられる。またその地の者たちがシヴァ神に留まって欲しいと懇願する場面は、大伝統のシヴァ信仰が地方に無理に侵入するのではなく、あくまでも融和的にその地に根を下ろす、といったようなヒンドゥイズム伝播の正当性を示しているようにも思われる。

2．第33章「グシュメーシュヴァラ・ジョーティルリンガの出現」和訳

本稿においては、上記のグシュメーシュヴァラ・ジョーティルリンガの縁起譚の後半部分である第33章の和訳を試みた。和訳の際底本としたのは、以下の刊本である[3]。

Rāmatej Pāṇḍey ed. *Śivamahāpurāṇam*, Caukhamba Vidyā Bhavan, Varanasi, 1986.（以下Cと略す）

サンスクリット版本として他に*Śrīśivamahāpurāṇam*, Nag Publisher, 1981（以下Nと略す）も参照し、各テキストで異同が有る場合にはその

---

[2] Tryambakeśvarajyotirliṅgaの縁起譚（KRS Ch.26）においては、ガンガー女神がシヴァ神に地上に留まるよう懇願し、例えばRameśvarajyotirliṅgaの縁起譚においては、『ラーマーヤナ』の主人公ラーマ王子がシヴァにインド南岸に留まってもらうよう懇願し、シヴァがその地にリンガを立てた（KRS Ch.31）。その他Oṃkareśvarajyotirliṅga（KRS Ch.18）、Kedārnāthajyotirliṅga（KRS Ch.19）の縁起譚にも同様の話がある。

[3] 英訳として*The Śiva-Purāṇa*, part 3,（*Ancient Indian Tradition and Mythology*, vol.3）, Motilal Banarsidass, Delhi, 1988を、さらにヒンディー語訳としては*Śivamahāpurāṇa*, Khemarāja Śrīkṛṣṇadās Prakāśan, Mumbai, 1999を参照した。

都度注記した。以下にテキストと和訳を示す。

＜サンスクリット・テキストおよび和訳＞

sūta uvāca/
putraṃ dṛṣṭvā kaniṣṭhāyā jyeṣṭhā duḥkham upāgatā/
virodhaṃ sā cakārāśu na saṃhatī ca tatsukham//1//
スータは言った。
妹（グシュマー）の息子を見て、姉（スデーハー）は苦しんだ。
彼女はすぐに憎しみを感じ、その幸せに共感はできなかった。

sarve putraprasūti tāṃ praśaśaṃsur[4] nirantaram/
tayā tat sahyate na sma śiśo rūpādikaṃ tathā//2//
妹の息子の出産を、すべての人々が絶え間なく賞賛した。
しかし彼女（姉スデーハー）は、子供の姿など［を見ること］に耐えられなかった。

supriyaṃ tanayaṃ taṃ ca pitroḥ sadguṇabhājanam/
dṛṣṭvā 'bhavat tadā tasyā[5] hṛdayaṃ taptam agnivat//3//
両親の愛情を受け、美徳の器であるその息子を見たその時
彼女の心は火のように燃えた。

etasmin anantare viprāḥ kanyāṃ dātuṃ samāgatāḥ/
vivāhaṃ tasya tatraiva cakāra vidhivac ca saḥ//4//
そうしているうちに、賢者（スダルマー）たちは［息子に］妻を娶らせる時期が来た。
そこで彼は儀軌にしたがい、息子の結婚をとり行った。

sudharmā ghuśmayā sārddham ānandaṃ paramaṃ gataḥ/

---

[4] Cではpraśasaṃsur、Nではpraśaśaṃsurとなっており、Nを採る。
[5] Cではtasyaとなっているが、Nのtasyāを採る。

sarve sambandhinas tasyāṃ ghuśmāyāṃ mānam ādadhuḥ//5//
スダルマーはグシュマーとともに非常に喜んだ。
彼女の親族はみな、グシュマーに敬意を払った。

taṃ dṛṣṭvā sā sudehā hi manasi jvalitā tadā/
atyantaṃ duḥkham āpannā hā hatāsmīti vādinī//6//
その時それを見てかのスデーハーは、心が燃えたぎった。
非常な苦しみを感じ、「ああ、私は傷ついた」と彼女は言った。

sudharmā gṛham āgatya vadhūṃ putraṃ vivāhitam/
utsāhaṃ darśayāmāsa priyābhyāṃ harṣayan iva//7//
息子と結婚した嫁が家にやって来た後、スダルマーは
二人の愛する［妻］を喜ばせようと、気持ちの高まりを見せた。

abhavad dharṣitā ghuśmā sudehā duḥkham āgatā/
na sahantī sukhaṃ tac ca duḥkhaṃ kṛtvā 'patad bhuvi//8//
グシュマーは喜び、スデーハーは苦しんだ。
［スデーハーはグシュマーの］幸せに耐えきれず、苦しんで地に倒れた。

ghuśmā 'vadad vadhūputrau tvadīyau na madīyakau/
vadhūḥ putraś[6] ca tāṃ prītyā prasūṃ śvaśrūm amanyata//9//
「息子もその嫁もあなたのもので、私のものではありません」とグシュマーは言った。
そして息子も嫁も彼女を、愛情をもって義理の母親だと考えた。

bharttā priyāṃ tāṃ jyeṣṭhāṃ ca mene naiva kaniṣṭhikāṃ/
tathāpi sā tadā jyeṣṭhā svāntarmalavatī hy abhūt//10//
夫（スダルマー）は妹ではなく姉を愛していた。
しかしながら彼女（姉スデーハー）は自分の心に穢れを抱えてしまった。

---

[6] Cではputraṃとなっているが、Nのputraśをとる。

ekasmin divase jyeṣṭhā sā sudehā ca duḥkhinī/
hṛdaye sañcinteti duḥkhaśāntiḥ kathaṃ bhavet//11//
ある日苦しんだ姉スデーハーは心の中で
「苦しみを鎮めるにはどうしたら良いのか」と考えた。

sudehovāca/
madīyo hṛdayāgniś ca ghuśmānetrajalena vai/
bhaviṣyati dhruvaṃ śānto nānyathā duḥkhajena hi//12//
スデーハーは言った。
「私の心の火は、［彼女の］苦しみから生まれるグシュマーの涙によってのみ必ず鎮められるだろう。他には何もない。

ato 'haṃ mārayāmy adya tatputraṃ priyavādinam/
agre bhāvi bhaved evaṃ niścayaḥ paramo mama//13//
だから今日私は彼女の愛する息子を殺してしまおう。
起こるべき事が起こるだろう。これが私の最上の決心だ。」

sūta uvāca/
kadaryāṇāṃ vicāraś ca kṛtyākṛtye bhaven na hi/
kaṭhoraḥ prāyaśo viprāḥ sāpatno bhāva ātmahā//14//
スータは言った。
賢者たちよ、けちな者たちの考えは、為すべきか為すべきでないかということに及ばない。
異母の本質は、たいてい残酷で自滅的である。

ekasmin divase jyeṣṭhā suptaṃ putraṃ vadhūyutam/
cicchide niśi cāṅgeṣu gṛhītvā churikāṃ ca sā//15//
ある日姉スデーハーは夜半にナイフを持ち
妻と一緒に眠っている息子の四肢を切り刻んでしまった。

sarvāṅgaṃ khaṇḍayāmāsa rātrau ghuśmāsutasya sā/
nītvā sarasi tatraivākṣipad dṛptā mahābalā//16//

彼女はグシュマーの息子の身体すべてをバラバラに刻んでしまった。
狂気した力の強い女は［息子の身体を］池に運び、そこに投げ入れた。

yatra kṣiptāni liṅgāni ghuśmayā nityam eva hi/
tatra kṣiptvā samāyātā suṣvāpa sukham āgatā//17//
グシュマーがいつもリンガを投げ入れていたその場所に
［息子の身体を］投げ入れて、安堵した女は帰って深い眠りに就いた。

prāptaś caiva samutthāya ghuśmā nityaṃ tathā 'karot/
sudharmā ca svayaṃ śreṣṭho nityakarma［ṃ[7]］samācarat//18//
早朝に起き、グシュマーは日常の儀礼をしかるべく行った。
また最上の人スダルマーもみずから日常の勤行を行った。

etasmin anantare sā ca jyeṣṭhā kāryaṃ gṛhasya vai/
cakārānandasaṃyuktā suśāntahṛdayānalā//19//
この時姉スデーハーは喜び、心の［嫉妬の］火がおさまり
たえまなく家の仕事を行った。

prātaḥkāle samutthāya vadhūḥ śayyāṃ vilokya sā/
rudhirārdrāṃ dehakhaṇḍair yuktāṃ duḥkham upāgatā//20//
かの花嫁は早朝に起き、［夫の］寝床が真新しい血にまみれ
身体の破片が付いているのを見て、［心が］苦しくなった。

śvaśrūṃ nivedayāmāsa putras te ca kuto gataḥ/
śayyā ca rudhirārdrā vai dṛśyante dehakhaṇḍakāḥ//21//
［花嫁は］義理の母親に言った。「あなたの息子はどこに行ったのでしょう。寝床には新しい血と身体の破片がついています。

hā hatā 'smi kṛtaṃ kena duṣṭaṃ karma［ṃ[8]］śucivrate/

---

[7] C、Nともに–ṃは無く、筆者が補った。
[8] C、Nともに–ṃは無く、筆者が補った。

ity uccārya rurodāti vividhaṃ tatpriyā ca sā//22//
ああ、私は打ちのめされました。正しい行いをする方よ、だれがこんな事をしたのでしょうか。」
そのように言い、彼（息子）の愛する彼女はさまざまな言葉で嘆いた。

jyeṣṭhā duḥkhaṃ tadāpannā hā hatāsmi kileti ca/
bahir duḥkhaṃ cakārāsau manasā harṣasaṃyutā//23//
姉スデーハーはその時苦しみが生じ、「本当に私も打ちのめされた」と言った。
［しかし彼女は］外見では苦しんでいるようにみせたが、心では喜んでいたのだった。

ghuśmā cāpi tadā tasyā vadhvā duḥkhaṃ niśamya sā/
na cacāla vratāt tasmān nityapārthivapūjanāt//24//
その時またグシュマーは嫁の苦しみを鎮め、その土製[9]［のリンガ］

---

[9] 土製のリンガに関してRao（1998：145）は『ナンディー・プラーナ』中の記述「土製のリンガは一切の目的を成就すると知られるべきである」（pārthivaṃ liṅgaṃ jñeyaṃ sarvārthasādhakam/）に言及している。また*Matsyapurāṇa,* Ch.258.24–25では、「リンガの根元も中間も等しく、一切の望みをかなえる、そのようなリンガを崇拝せよ。そうでなければ悪いことがおこるだろう。宝石、水晶、土でできた［リンガ］を作るべきである（大意）」（atha mūle ca madhye tu pramāṇesarvataḥ samam/ evaṃ vidhantu yal liṅgaṃ bhavet tat sārvakāmikam//24// anyathā yad bhavel liṅgaṃ tad asat saṃpracakṣate/ evaṃ ratnamayaṃ kuryāt sphāṭikaṃ pārthivaṃ tathā//25//）と述べられている。

[10] vrataは「誓願儀礼」と訳される場合が多いが、vrataの意味は文献により多様である。Kane（1974：31）はヒンドゥー教の儀礼について述べた*Raghunandana*および*Dharmasindhu*がvrataの一般的な意味を適切に述べているとしている。そこではvrataはいくつかの儀礼行為のアイテム、例えば沐浴（snāna）、朝の勤行（prātaḥ–sandhyā）、儀礼執行の宣言（saṃkalpa）、ホーマ（護摩）、神の供養（pūjā）、断食（upavāsa）、バラモン僧、結婚した女性、貧しい人などへの食事の提供、vrataの期間に定められているルールを順守することなどからなるという。また『リグ・ヴェーダ』や家庭経文献（gṛhyasūtra）におけるvrataの定義については（Kane 1974：1–27）に詳しい。

の供養［からなる］誓願儀礼[10]（ヴラタ）を絶えず行ったので、動揺しなかった。

manaś caivotsukaṃ naiva jātaṃ tasyā manāg api/
bhartāpi ca tathaivāsīd yāvad vratavidhir bhavat[11]//25//
［グシュマーの］心には少しも悲しみは生じなかった。
儀礼が行われている間、夫もまた同様だった。

madyāhne pūjanānte ca dṛṣṭvā śayyāṃ bhayāvahām/
tathāpi[12] na tadā kiṃcit kṛtaṃ duḥkhaṃ hi ghuśmayā//26//
昼になり儀式が終わった時に、恐ろしい寝台を見ても
グシュマーは少しも苦しくなかった。

yenaiva cārpitaś cāyaṃ sa vai rakṣāṃ kariṣyati/
bhaktapriyaḥ[13] sa vikhyātaḥ kālakālaḥ[14] satāṃ gatiḥ//27//
「その者によって彼（息子）が生み出された、まさにその者が彼を守るでしょう。
死神カーラを亡きものにした彼は、信者たちに愛される者として有名です。

yadi no rakṣitā śambhur īśvaraḥ prabhur ekalaḥ/
mālākāra ivāsau yān yuṃkte tān viyunakti ca//28//
もし私たちが［シヴァ神に］守護されるなら、花環を作る者のように自在神、唯一の方である、かのシャンブ（シヴァ）は繋がれたものを引き離します。

adya me cintayā[15] kiṃ syād iti tattvaṃ vicārya sā/

---

[11] Nではbhavetとなっている。
[12] Cではtathapiとなっているが、Nのtathāpiをとる。
[13] Nでは–priyasである。
[14] Nでは–kālasである。
[15] Cではcitayā、Nのcintayāをとる。

na cakāra tadā duḥkhaṃ śive dhairyaṃ samāgatā//29//
今私が心配してどうなるというのでしょう」と、彼女は真実を理解し苦しむことはなく、その時確固としてシヴァに身を捧げた。

pārthivāṃś ca gṛhītvā sā pūrvavat svasthamānasā/
śambhor nāmāny uccarantī jagāma sarasas taṭe//30//
以前のように確固とした気持ちで、土で作った[リンガの像]をつかみシャンブ（シヴァ）の名前を唱えながら池のほとりに行った。

kṣiptvā ca pārthivāṃs tatra parāvartata sā yadā/
tadā putras taḍāgastho dṛśyate sma taṭe tayā//31//
彼女が土製［のリンガ］を投げて帰る、まさにその時に
池のほとりに息子が立っているのを彼女は見た。

putra uvāca/
mātaraṃ hi miliṣyāmi mṛto 'ham jīvato 'dhunā/
tava puṇyaprabhāvād dhi kṛpayā śaṃkarasya vai//32//
息子は言った。
「あなた［が積んだ］功徳の力とシャンカラ（シヴァ）のお慈悲のおかげで、死んだ私がまさに今生き返って、お母さんに会えました。」

sūta uvāca/
jīvitaṃ taṃ sutaṃ dṛṣṭvā ghuśmā sā tatprasūr dvijāḥ/
prahṛṣṭā nābhavat tatra duḥkhitā na yathā purā//33//
スータは言った。
再生者よ。生き返った息子を見て、かのグシュマーは以前のように変わらなかった。
その時喜びもしなければ、苦しむこともなかった。

etasmin samaye tatra svāvir āsīc[16] chivo drutam/

---

[16] Cではsvāvirācとなっているが、Nのsvāvir āsīcをとる。

jyotīrūpo maheśaś ca saṃtuṣṭaḥ pratyuvāca ha//34//
この時そこに自らの主、光り輝く姿をした偉大な主シヴァが
ただちに現れ、満足した彼は言った。

śiva uvāca/
prasanno 'smi varaṃ brūhi duṣṭayā mārito hy ayam/
enāṃ ca mārayiṣyāmi triśūlena varānane//35//
シヴァは言った。
「私は満足した。美しい顔の女よ、望みを述べよ。この者（息子）は
邪悪な女により殺された。私はその女を三叉戟で殺してやろう。」

sūta uvāca/
ghuśmā tadā varaṃ vavre supraṇamya śivaṃ natā/
rakṣaṇīyā tvayā nātha sudeheyaṃ svasā mama//36//
スータは言った。
その時グシュマーは身をかがめてシヴァに礼拝し、望みを語った。
「主よ、あなたは私の姉であるこのスデーハーをお守りください。」

śiva uvāca/
apakāraḥ kṛtas tasyām upakāraḥ kathaṃ tvayā/
kriyate hananīyā ca sudehā duṣṭakāriṇī//37//
シヴァは言った。
「その女により傷つけられたのに、なぜおまえは助けようとするのか。
悪事を働いたスデーハーは殺されるべきである。」

ghuśmovāca/
tava darśanamātreṇa pātakaṃ naiva tiṣṭhati/
idānīṃ tvāṃ ca vai dṛṣṭvā tatpāpaṃ bhasmatāṃ vrajet//38//
グシュマーは言った。
「あなた様にお会いしただけで、罪は無くなってしまいます。
今あなた様を拝見して、彼女の罪は灰と消えるでしょう。

apakāreṣu yaś caiva hy upakāraṃ karoti ca/
tasya darśanamātreṇa pāpaṃ dūrataraṃ vrajet//39//
諸々の悪事に対し救いをもたらすお方、
そのお方を拝見するだけで、[姉スデーハーの］罪は遠くに去るでしょう。

iti śrutaṃ mayā deva bhagavad vākyam adbhutam/
tasmāc caiva kṛtaṃ yena kriyatāṃ ca sadāśiva//40//
主よ、そのように私は［シヴァ］神の奇跡のお言葉をうかがいました。
それゆえ常住なるシヴァ神よ、為されるべきことが為されたのです。」

sūta uvāca/
ity uktas tu tayā tatra prasanno 'ty abhavat punaḥ/
maheśvaraḥ kṛpāsindhuḥ samūce bhaktavatsalaḥ//41//
スータは言った。
そこでそのように彼女（グシュマー）に言われ再び満足した
大海のような慈悲を持ち、信奉者に優しいマヘーシュヴァラは喜んだ。

śiva uvāca/
anyad varaṃ brūhi ghuśme dadāmi ca hitaṃ tava/
tvad bhaktyā suprasanno 'smi nirvikārasvabhāvataḥ//42//
シヴァは言った。
「グシュマーよ、では他の望みを言え。私はお前に利益を施そう。
変わらない本性から来るお前の献信により、私は満足した。」

sūta uvāca/
sovāca tadvacaḥ[17] śrutvā yadi deyo varas tvayā/
lokānāṃ caiva rakṣārtham atra stheyaṃ madākhyayā//43//
スータは言った。
その言葉を聞いて、彼女は言った。「もしあなた様が恵みを与えてく

[17] Nではtadvacaśである。

ださるなら
世間を守護するために、私の名前でここに留まってください。」

tadovāca śivas tatra suprasanno maheśvaraḥ/
sthāsye 'tra tava nāmnāhaṃ ghuśmeśākhyaḥ[18] sukhapradaḥ//44//
そこにおいて大変満足した大自在神シヴァは、次のように言った。
「お前の名前で私はここに留まろう。『グシュメーシャ』と名乗り、［世間に］幸福を与えよう。

ghuśmeśākhyaṃ suprasiddhiṃ liṅgaṃ me jāyatāṃ śubham/
idaṃ saras tu liṅgānām ālayaṃ jāyatāṃ sadā//45//
『グシュメーシャ』という名の私のリンガは有名で吉祥となるだろう。
この池は常にリンガの住処となろう。

tasmāc chivālayaṃ nāma prasiddhaṃ bhuvanatraye/
sarvakāmapradaṃ hy etaddarśanāt syāt sadā saraḥ//46//
それゆえに三界において「シヴァ・アーラヤ（シヴァ神の住処）」という名で有名となろう。
池はこれを見るだけでも、常に一切の望みをかなえてくれるだろう。

tava vaṃśe śataṃ caikaṃ puruṣāvadhi suvrate/
īdṛśāḥ putrakāḥ śreṣṭhā bhaviṣyanti na saṃśayaḥ//47//
優れた誓願儀礼を行う者よ、お前の家系には101［の世代］のあいだ
そのような優れた息子たちが生まれることは疑いがない。

sustrīkāḥ[19] sudhanāś caiva svāyuṣyāś ca vicakṣaṇāḥ/
vidyāvanto hy udārāś ca bhuktimuktiphalāptaye//48//
すばらしい妻を持ち、富に恵まれ、長寿で賢明であり
学問があり正直であり、世俗の楽しみと解脱という果を得るだろう。

---

[18] Nでは–ākhyasである。
[19] Nでは–kāsとなっている。

śatam ekottraraṃ caiva bhaviṣyanti guṇādhikāḥ/
īdṛśo vaṃśavistāro bhaviṣyati suśobhanaḥ//49//
また、さらなる101の徳が生じるだろう。
そのように一族の系譜は輝かしいものとなるだろう。」

sūta uvāca/
ity uktvā ca śivas tatra liṅgarūpo 'bhavat tadā/
ghuśmeśo nāma vikhyātaḥ saraś caiva śivālayam//50//
スータは言った。
その時シヴァはそのように言い、そこでリンガの姿をとった。
［そのリンガは］「グシュメーシャ」という名前で知られ、池は「シヴァ・アーラヤ[20]」（シヴァ神の住処）となった。

sudharmā sa ca ghuśmā ca sudehā ca samāgatāḥ/
pradakṣiṇaṃ śivasyāśu śatam ekottaraṃ dadhuḥ//51//
スダルマー、グシュマー、そしてスデーハーは一同に会し
ただちにシヴァ神［の周囲を］101回右繞した。

pūjāṃ kṛtvā maheśasya militvā ca parasparam/
hitvā cāntarmalaṃ tatra lebhire paramaṃ sukham//52//
マヘーシャ（シヴァ）の供養を行い、お互いに顔を合わせ
心の中のけがれを払い、最上の幸福に到達した。

putraṃ dṛṣṭvā sudehā sā jīvitaṃ lajjitā 'bhavat/
tau kṣamāpyācarad viprā nijapāpahaṃ vratam//53//
賢者よ、生き返った息子を見て、スデーハーは恥入った。
彼ら二人に謝り、みずからの罪を無くすための誓願儀礼を行った。

---

[20] グシュメーシャ・ジョーティルリンガと同一視される現代のグリシュネーシュヴァル・ジョーティルリンガ寺院（マハーラーシュトラ州エローラ地区）の近くにも‘śivālaya’と呼ばれる沐浴場があり、信者はグリシュネーシュヴァル寺院を参拝する前にそこで沐浴すべきであると考えられている。

ghuśmeśākhyam idaṃ liṅgam itthaṃ jātaṃ munīśvarāḥ/
tad dṛṣṭvā pūjayitvā hi sukhaṃ saṃvarddhate sadā//54//
賢者たちよ、この「グシュメーシャ」と呼ばれるリンガはこのようにして生まれたのだ。
実にそれを見て供養する［者は］常に至福におもむく。

iti vaś ca samākhyātā jyotirliṅgāvalī mayā/
dvādaśapramitā sarvakāmadā bhuktimuktidā//55//
以上のように、私はあなた方に一連のジョーティルリンガについて語った[21]。
12のリンガ像は一切の望みをかなえ、世俗の利益と解脱を与えてくれる。

etaj jyotirliṅgakathāṃ yaḥ paṭhec chṛṇuyād api/
mucyate sarvapāpebhyo bhuktiṃ muktiṃ ca vindati//56//
このジョーティルリンガの話を読む者、あるいは話を聞くだけでもした者は一切の罪から解放され、世俗の利益と解脱を知る（手に入れる）。

iti dvādaśajyotirliṅgamāhātmyaṃ samāptam/
iti śrīśivamahāpurāṇe caturthyāṃ koṭirudrasaṃhitāyāṃ ghuśmeśajyotirliṅgotpattimāhātmyavarṇanaṃ nāma trayastriṃśo 'dhyāyaḥ//
以上で「12ジョーティルリンガの偉大さ」を終わる。
以上が吉祥なる『シヴァ・マハープラーナ』の第４巻、『コーティ・ルドラ・サンヒター』中の「グシュメーシャ・ジョーティルリンガの出現」と呼ばれる第33章である。

---

[21]『シヴァ・プラーナ』第４巻「コーティ・ルドラ・サンヒター」第14章から第33章までが12ジョーティルリンガの縁起譚を述べており、このグシュメーシャ・ジョーティルリンガが最後である。インドの現代ヒンドゥイズムにおいては、グシュメーシャ・ジョーティルリンガと同一視されるグリシュネーシュヴァル・ジョーティルリンガは12リンガ寺院巡礼の最後に参詣すべき寺院であると考えられている。

参考文献

立川　武蔵　2008『ヒンドゥー神話の神々』せりか書房.

山口　しのぶ　2008「12ジョーティル・リンガ寺院について―マハーラーシュトラ州グリシュネーシュヴァル寺院を中心として―」『印度学仏教学研究』57号、pp.262–268.

山口　しのぶ　2012「光り輝くシヴァ神の聖地―リンガ寺院の神話と象徴―」『聖地と聖人の東西　起源はいかに語られるか』（藤巻和宏編）勉誠出版、pp.452–472.

山口　しのぶ　2013「『グシュメーシュヴァラ・ジョーティルリンガ』の縁起譚―『シヴァ・プラーナ』第４巻『コーティ・ルドラ・サンヒター』第32章和訳―」『東洋学論叢』38、pp.104–116.

Kane, P.V. 1974 *History of Dharmaśāstra*, Vol.2, Part 1, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona.

Kumar, Pushpendra ed. 1986 *Śivamahāpurāṇam*, Nag Publisher, Delhi, 1986.

Miśra Jvālā Prasādjī ed. 1999 *Śivamahāpurāṇa*, Khemarāja Śrīkṛṣṇadās Prakāśan, Mumbai.

Rao, S.K. Ramachandra 1998 *Śiva–Kosha*, Vol.1, Kalpatharu Research Acadmy, Bangalore.

Pāṇḍey, Rāmateja ed. 1986 *Śivamahāpurāṇam*, Caukhamba Vidyā Bhavan, Varanasi.

Shastri, J.L. ed. 1988 *The Śiva–Purāṇa*, part 3, (Ancient Indian Tradition and Mythology, vol.3), Motilal Banarsidass, Delhi.

Singh, Nag Sharan ed. 1983 *Śrīmatsyamahāpurāṇam*, Nag Publishers, Delhi.

Vitekar, M.B. 1991 Ellora, Devasthan Trust, Ellora.